

## 【研修報告】

## 平成24年度 米国国際看護学演習に参加して

— 看護学における教育・研究と実践の循環に向けて —

山 崎 歩\*

## I. はじめに

今夏、実施された米国国際看護学演習に研修教員として参加する機会を得た。その中で研修では、主に今年3月に学術交流協定に係る調印を実施したコロラド大学看護学部を訪問し、講義や施設見学などを実施した。そこでの教授法やアメリカにおける看護学教育制度を通しての学びを以下に報告する。

## II. 国際看護学演習プログラム概要

演習は、平成24年8月21日から9月3日の2週間で実施され、参加者は、学部学生13名、大学院生3名（うち1名既卒者）、引率教員3名、研修教員1名の計20名であった。演習スケジュールは、コロラド大学看護学部での5日間の講義や施設見学、コロラド大学病院、小児病院の見学を中心として構成され、その他、米国赤十字マイルハイ支社への訪問見学など多彩な内容で、学生自身の異文化理解や異文化交流を促進するプログラムであった。（表1）

## III. コロラド大学の概要

コロラド大学は米国コロラド州に位置し、4つのキャンパスに13の学部、18,000人の学生を有する大規模な大学である。

今回、研修を受けた看護学部はデンバー中心部より車で20分足らずの場所にある Anschutz Medical Campus 内に位置していた。同キャンパス内には、看護学部以外に、医学部、歯学部、薬学部も設置されており、広大なキャンパスを囲むように敷地内には実習病院でもある University of Colorado Hospital および Children's Hospital Colorado の2つ病院も設置されてあった。

看護学部は1898年に創立され、アメリカ中西部では最も古い歴史を持つ看護大学である。学士に続き1950年には、Master of Science (MS) 修士プログラム、1965年にはアメリカ初の Nurse Practitioner (NP) の教育プログラムを小児看護学分野において構築した。また、1978年には Doctor of Philosophy (PhD) 博士プログラム、2005年からは Doctor of Nursing Practice (DNP) 看護実践博士の教育プログラムも開始し、現在800名余りの在学生の看護学教育を行っている。

## IV. 大学における教授法からの学び

## 1. 講義での教授方法

今回の研修会では、9つの講義がプログラムに組み込まれており、看護学部の教員やコロラド大学病

表1. 国際看護学演習 コロラド大学研修プログラム

日 程	午 前	午 後
8月23日（木）	コロラド大学看護学部概要と紹介 (Dr.Magilvy) 小児看護学 Issues in Pediatric/Child Health Care (Dr.Gilbert)	Welcome Lunch with Faculty and Students ヘルスケアシステムと看護 (CNS Ms.Asakura) Health Care System and Nursing in the U.S
8月24日（金）	老年看護学 Issues in Caring for Elderly (Dr.Nelson) Center for Advancing Professional Excellence (CAPE) Simulation Lab and Home Care Lab 見学	University of Colorado Hospital 見学 ICU, CICU, ER, Ope 室, 外科・内科病棟
8月27日（月）	精神看護学 Psychi-Mental Health Nursing (Dr.Weber) 緩和ケア Palliative and End of life care (Ms.Asakura & Dr.English)	成人看護学 Nursing Care of Adults (Dr.Robinson) Nursing Practice Room CON Simulation Center 見学
8月28日（火）	米国看護学教育制度・大学院教育 Graduate Nursing Education in U.S (Dr.Erickson)	The Children's Hospital 見学 ER, NICU, 各病棟, 外来
8月29日（水）	Health Science Library 見学 ヘルスケアとその改革 (Prof.Igoe) The U.S Health Caer System and Health Care Reform	Farewell Party Program Certificates presented to Students JRCHCN students speech, Songs, Performance

\* 日本赤十字広島看護大学

院で働く Clinical Nurse Specialist (CNS) からアメリカにおける各看護専門領域の現状と課題、医療システムや健康問題の特徴について、また、看護学教育の現状や高度看護実践について行われた。参加した学生達は日本での自身の学習経験と比較しながら興味深く聴講している姿が印象的であった。

講義をとおして、教員の教授法から学ぶべき点多くあり、特に印象深かった講義としてあげられる一つとして、成人看護学分野の教員によるぬいぐるみを用いた災害トリアージの講義があった。講義では、災害の際のトリアージの原則を学生に解説後、受傷状況を記載したタグを取り付けたぬいぐるみをトリアージの対象者に見立て、緊急性の優先度を学生個々に問う形態の講義であった。講義の前半で教授したトリアージの原則を基に、災害時の受傷優先度の決定というシビアな状況を仮定しながら、学生自身で思考判断して答えを導き出しており、双方向からの学びを統合する教授法を垣間見ることが出来た。(写真1、写真2)

講義全般をとおして教員が学生の思考を引き出す質問を多数行っていた。同時に、質問に対する肯定的なフィードバックとともに、ディスカッションを中心として一方向にとどまらない講義をいきいきと展開している場面に多く遭遇した。また、看護学の教授を行いながら講義の主体は常に学生にあり、学生自身の疑問を受ける形で講義を展開し、質問を糸口として更に思考を広げていくやり取りなども今後の自身の教授法として参考にするべき点であった。本学のような100名を超える多人数講義の際の、一方向の講義にならない教授方法の工夫とともに、学生の思考に働きかけるディスカッション等も今後検討していきたいと考えた。

## 2. 演習や実習における教授形態・方法

本研修では、実習施設でもある University of Colorado Hospital および、Children's Hospital Colorado の2箇所の病院を見学する機会を得、また。臨地実習中の看護学部 of 学生に出会う場面もあった。コロラド大学の臨地実習は、主に3・4年次に実施されているが、医療制度の違いから患者の在院日数は短期間であり臨地での実習期間は、週のうち2日から3日ということであった。実習後は、学内で学びを振り返り不足している学習を補填し、次の実習に備えるという教育方法がとられていた。同時に、臨地実習は知識面のみに留まらず、看護実践学習の場でもあるため、臨地実習前には大学内に設置されてある CON Clinical Education Center (CEC) で学内演習を行った後に実習に向かっていた。同セ



写真1. 成人看護学 トリアージの講義



写真2. 対象者に見立てたトリアージ用ぬいぐるみ

ンターの見学の際には、パラメディカルスタッフを含む教員がオフィスアワーを設けて在中し、自己学習を行う学生の主体的学びを促す体制がとられていることの説明を受けた。ここでも臨地実習での学びと学内での学びを統合するためのプログラムが構築されていると感じた。

## V. 大学での教育・研究と実践との循環にむけて

今回の研修会において興味深い内容としてアメリカにおける看護学の教育制度があった。

大学敷地を取り囲むように設置されている University of Colorado Hospital および Children's Hospital Colorado の見学の際、高度看護実践者である多くの CNS に会うことが出来た。

なかでも University of Colorado Hospital は、1,500名の registered nurse (RN) が勤務しており、看護師全体の約90%が学士以上の資格を有していた。働きながら修士への入学等も積極的に実施されていた。また、進学の際には組織内でもキャリアを支援する勤務体制がとられており、高い看護実践に向けての取り組みが個々の意識とともに組織全体で行われていると強く感じた。病院内で勤務する CNS は臨地実習指導に留まらず、大学での教育にも参画していた。今回の研修でも講義を担当してい

ただいたがん看護の CNS も臨床の場で実践を行いつつ研修会での講義も担当し、自身も現在 PhD の取得を目指し大学院生として学んでいる途中でもあった。

また今回、実際に講義を担当していただいた教員の中に大学での教育活動の傍ら、Nurse Practitioner (NP) や Doctor of Nursing Practice (DNP) として看護実践を継続されている先生方もおられた。これらはアメリカでは、珍しいことではなく自身の実践の場を研究や教育のフィールドとして活動し、得られた結果を実践の場へ還元、浸透・活用するという点で大変興味深かった。

アメリカでは、高度看護実践者として2004年から DNP の育成が開始され、PRACTICE (実践) EDUCATION (教育) SCHOLARSHIP (学術的な学識) の3点を期待される役割として担っている。一方で、PhD の期待される役割として、RESEARCH (研究) EDUCATION (教育) SCHOLARSHIP (学術的な学識) が挙げられており、PhD が研究結果として示したものを卓越した看護実践能力と学術的な学識をもつ DNP が臨床実践の場で活用・浸透させるという教育・研究と実践の循環的な発展のかたちが形成されていた。

日本における高度看護実践者育成では CNS 教育プログラムが1994年から大学院において開始され、CNS は「実践」「相談」「調整」「倫理調整」「教育」「研究」という6つの役割を担って活動を行っている。また、2010年から検討されてきた特定看護師 (仮称) NP 制度については、「看護師特定能力認証制度骨

子 (案)」として提示され、検討が継続されている。NP 制度の議論がなされている日本において DNP は、まだまだ制度として確立するには難しいと考える。一方で CNS は現在10分野、全国で795人と非常に少ない現状であり、DNP のように実践と研究という2つの部分を担うには負担が大きいと考える。今回、アメリカの看護学の現状を垣間見ることで、自身の教育と研究を臨床の場で働く実践者とともに協同して循環させていくことが、看護学発展の一端を担う大学教員としてのあり方であると再認識させられた。

## VI. おわりに

今回の研修でアメリカの看護学の歴史や看護教育制度について触れることが出来、自身の看護学教育や研究についても見つめなおす機会となった。本研修で学んだことを基にし、微力ながら今後の看護学教育・研究の発展に尽力していきたいとあらためて感じた。

## 謝 辞

本研修は、日本赤十字広島看護大学 海外旅費助成を受けて参加致しました。貴重な機会を与えてくださいました、先生方、本学の皆様に深謝致します。

## 参考文献

洪愛子 (2012) 「特定看護師 (仮称)」業務試行事業の概要. 看護, 2, 38-41.

